

信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」(6770m未踏)偵察行 その5

トラックが10台近く埋まっている

7月30日 朝起きると、東の山が金色に輝いている。しかし、僕の心は沈んでいた。昨日からの情報を総合すると、開通までは、まだしばらく時間がかかりそうということである。朝食（といってまだ私自身はほとんど何も食べられない状態だが）が済んだところで、善後策を検討し、とにかく今日は行けるところまで行って様子を見てみようということになった。本当ならここから一番わくわくする場所なのだが、先が見えない以上、正直なところ心配ばかりが先立つ。目の前のヤルカンド河は濁流となっているが、ヌルさんや秦さんによれば、通常の3倍以上の水量だそうで上部ではやはりここ数日間で普段をはるかに超す量の雨が降ったことが知れる。

10:50 テントキーパーのヌルさんを残して4人で出発する。12:00左手の方向に白い雪を抱いた俊峰が見える。このあたりの山はすべて未踏峰だが、それが未踏のまま残ったのはアプローチが悪いからだというのが直ちに了解される。途中には「道班」という日本で言えば国交省に当たる役所の分室（といっても単なる人力を主体にした道普請だと思われる）があるが、おそらく先の決壊箇所に行っているのだろう、誰の姿も見えなかった。ヤルカンド河の水量は多く、時には路肩ぎりぎりまで水がついており、いつ道を削るかわからないような切り通しの場所が何カ所もある。ずっと河の右岸を行くのであるが、左手の氷河をいただいた山から押し出された土砂で道が崩れているところも何カ所もある。右岸にも左岸にも結構魅力的な山がチラチラと見えるが、そのすべてが手つかずの峰々である。やがて、道はヤルカンド河から離れ、徐々に高度を上げていく。途中には鉄鉱石が出る場所があるとのことで、山の中腹に向けて道が幾本も開かれていた。西藏から空荷で帰ってきたトラックはここで鉄鉱石を積んで新疆へ戻るのである。13:30へイカ峠（黒恰峠：新疆で購入した地図には「柯克阿特達坂」と記載があった）を越えた。ここは行政区ではカシュガル地区とホータン地区の境にあたる。左手には6500m級と思しき連嶺が連なり素晴らしい景色である。

14:00目の前に30台ほどのトラックの車列が現れた。万事休す。ここまでか。車を止めて、先頭のところまで歩いて行くことにする。生きたままの豚や鶏を積んだトラックではすでに犠牲も出ているようだ。生野菜もこの炎天下では腐り始めてもいる。しかし、これらのトラックは行くも進むもままならずの状態、ドライバーたちは何人かで集まっては為す術もなくたたずんでいるばかり。30分ほど歩くとトラックの先頭



決壊現場で開通を待つトラック

に出た。道路標識は「326km」（イェチョンからの距離）を示している。左の氷河をいただいた山からの沢が道を石で覆い、先へ進めなくしている。秦さんの日産パトロールならあるいはここを越えることは可能かも知れない。しかし、ドライバーたちの話では少なくともこの先2カ所で決壊が起きており、雨が止んだ今でも午後

なるとアフタヌーンフラッドが発生し、手も足も出ない状態。8台か9台のトラックが埋まっているとの情報もあった。我々が車で行く予定の地点はまだ170kmも先である。とても歩いて行くことは叶わない。仕方がないが、今日のところはここから帰るしかあるまい。イエチョンから326kmの道標が

最接近地点。久根さんとは、「最低でも、山の写真はとって帰ろう。そのためには後半の日程は全てキャンセルしていただけるだけマザーで待機しよう。」と話をし、決壊地点をあとにした。

17:45マザーに戻った。ヌルさんの集めた情報を聞きながら今後のことについて打ち合わせをする。我々はとにかく可能性がある限りここに残りたいということ传达了が、結局「今の段階では復旧の見通しは立たない。道班だけでは機材も足らずどうにもならず、軍の援助を仰がねばならない。仮にここで、3日4日延ばしたからと行って、おそらくどうにもならないだろう。」というのがヌル・周両氏の得た情報だった。僕は、作物がとれない西藏阿里地区への生命線ともいえるこの道が、そういつまでも不通の状態のまま放っておかれることもあるまいと高を括っていたのだが、現実を知らされる中で、これは駄目かなと思わざるを得なくなってきた。ちょうど期を一にしてこの山の裏側にあたるパキスタン北西部で大洪水が発生していたことや、やむなく引き返した我々が西域南道に出てもあちこちで洪水の爪痕が残っていたことなど、実際、後に色々な情報を総合してみると、結局行くのは無理だったのかなと思わされる部分も多かったが、しかし、僕の気持ちとしては2年越しで来た山にこんな想定外の話で、近寄ることもできないままむざむざ帰るなどと言うことはできないというのが本音であった。撤退やむなしと結論を出さざるを得なかったが、その後ずっと青空を眺めながら、幾度となく残るべきであったのではないかという思いに駆られた。

夜、久根さんが高度の影響で少し具合が悪い感じであった。僕はだいたい復調してきたので、ヌルさんのテントを訪れて来年の隊のことについて少し具体的な話を詰めた。偵察ができない今考えられるタクティクス、登山料のこと、輸送のトラックやランクルの手配、などなど。内心忸怩たる思いを感じながら、少し突っ込んだ話をしたあと、外へ出ると、降るような星が煌めいていた。ヘッドランプの明かりに照らされた先には細かい砂塵が飛んでいくのが見える。沙漠の山だなあと感じ入った。

先頭のトラック



ここはランクルなら越えられそうだったが・・・。



路肩まで水がついたヤルカンド河



～イカ峠からの眺め



～イカ峠付近の未踏峰群